つなぐ　つなげる　つながりあう　総合的な学習の時間
～　課題の探究を通して、自己の生き方を問い続ける子供の育成　～

熊本市立日吉東小学校（中・高学年部）

要　約

社会の急激な変化により、予測困難な時代になった今日、私たちは社会の担い手として、自ら課題を見いだし、多様な考えを持つ他者と協働的に解決し、新たな知や納得解を生み出すこと等が求められている。同様に、総合的な学習の時間では、探究的な活動に主体的・協働的に取り組み自己の生き方を考えることを目標としているが、教師自身の主体性が必要であり、授業の進め方がパターン化することも多い。本研究を通して、教師自身が新たな挑戦を行うことで、子供の主体性や自信も向上することが明らかになった。

キーワード　総合的な学習の時間、つなぐ・つなげる・つながりあう、課題設定と単元構成、振り返り、子供同士の関わり合い

1　主題設定の理由

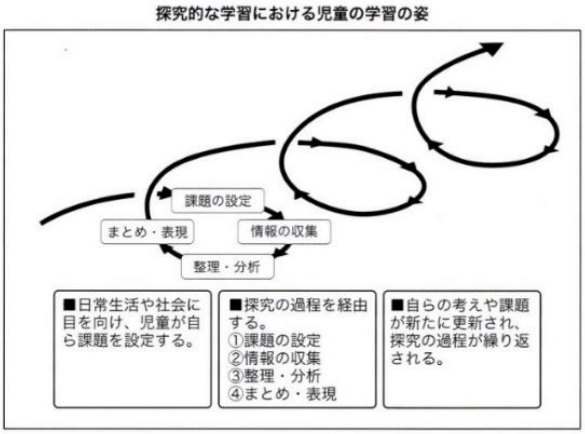
令和３年１月の中央教育審議会答申では、2020 年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、その姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」としている。「個別最適な学び」が「孤立した学び」であってはいけない。そのためには、これまでも重視されてきた、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士であるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の担い手となることができるよう「協働的な学び」を充実することが重要となる。

このことは、探究的な活動に主体的・協働的に取り組み自己の生き方を考えることを目指す総合的な学習の時間の目標と一致するところである。そこで、総合的な学習の時間の充実を図るために、本研究を進めることにした。

2　主題・研究の視点について

⑴　「つなぐ　つなげる　つながりあう」とは

「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」において「探究的な学習における子供の学習の姿」として図のような一連の探究プロセスが示されている【図１】。「自己の生き方を問い続ける子供」の姿を導き出していくためには、探究プロセスの「質」を高めていく必要があると考える。そのための視点を以下に示す。



【図１　探究のプロセス】

②　【視点１】子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫（つなぐ）

ア　子供の思いや願いを引き出すための対象や事象との出会い方の工夫
イ　合科的・教科横断的な授業デザインの展開

「つなぐ」とは、「教師がファシリテーターとしての役割を果たすこと」である。
子供の思いや願いを基にした探究活動でなければ、「主体的・対話的で深い学び」を実現できない。子供の「何とかしたい」や「こうしたら解決できそうだ」という思いや願いを基に課題設定や、子供が辿り着きたいイメージを持って探究できるような単元構成の工夫が、教師に求められる。

また、各教科等で学んだことを総合的な学習の時間に生かすことで、子供の学習は一層の深まりと広がりを見せる。つまり、合科的・教科横断的な学習を通して、子供の活動と各教科等で身に付けた力を意図的につなぐ工夫をすることも教師の大切な役割である。

② 【視点２】 自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫（つなげる）

ア 振り返りを書く際の視点の工夫 **イ 振り返りを生かし、次の探究活動へつなげる指導の工夫**

「つなげる」とは、「探究活動を振り返りでつないでいくこと」である。

「振り返り」とは、自分の学習状況を俯瞰的に捉え、新たな自分の目標（課題）を設定し、見通しを持つことである。「前時と本時の学びを関連付け、どう生かすか」「授業前後の考え等を比較し、自分がどう変わったか」等の視点を設け、効果的な振り返りの場を随時設定することが重要である。

また、子供の振り返りの記述、「問い」や「考えのずれ」を基に、次の探究活動へつなげていくことも教師の大切な役割である。曖昧な点を見取り、それを表出させて、対話を促したりすることで、更なる次の探究活動へつなげていく。

③ 【視点３】 課題解決に向け、子供同士の関わり合いを生み出すための工夫（つながりあう）

ア 考えや意見を整理し、可視化する工夫 **イ 思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）**

「つながりあう」とは、「一人一人が自分の思いや考えを基に、課題解決に向け仲間と協働すること」である。

子供が自ら思考したことは、目の前で操作したり可視化したりする思考ツール等の「考えるための技法」の活用により、自分の思考が整理され、課題解決の際にも生かされていく。また、子供たちは友達と思いや考えを整理する活動を通して、協働することのよさや難しさに出会い、試行錯誤しながら納得解を生み出していくことで協働することのよさや楽しさを実感する。

⑵ 「自己の生き方を問い続ける」とは

「自己の生き方を問い続ける」とは、社会や自然の一員として、自分は何ができるか、どのようにすべきかを考えること、自分にとっての学ぶことの意味や価値を考えていくこと、学んだことを自分の人生・将来につなげていくことである。学習を通して、実社会や実生活の課題を探究することで、自分のよさや可能性に気付くと共に、自分なりの納得解をもち、社会に関わっていこうという姿勢が生まれる。その土台があってこそ、自己の生き方を問い続ける子供の姿が期待できる。

３　研究の実際

⑴　第３学年　総合「日吉東のすばらしさを守ろう」の実践

①　単元の概要

本単元は、日吉東校区の景観の保護、改善について考えていくことで、地域に対する理解を深め、誇りや愛着、ふるさと意識を持つことをねらいとしている。

子供は、生活科のまち探検や社会科の校区調べの学習を通して、日吉東のまちについて学んでいる。校区の景観は、登下校時に子供が日常的に目にするものである。景観は地域によって違い、見る人によって感じ方も様々である。こうした景観は、地域の人々や行政の努力によって保護、保全されている。そこで、景観という五感を使った新しい視点でまちを見直すことで、「もっと知りたい、よくしたい。」と思える機会を設定し、その中で必要な情報を収集し、伝え合う力を育成する。

また、好きな景観や苦手な景観を探して持ち寄り、よい景観を守ったりさらによくしたりする方法を考える活動は、日吉東校区のよさに気付き、まちの一員として郷土への思いを深めることにつながる。そこで、子供がこの学習を通して、まちの景観の重要性や役割を知る第一歩にしたいと考え、学習計画を立てた【図３－１】。

【図３－１　学習の流れ図】

②　視点１　子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫（つなぐ）

ア　子供の思いや願いを引き出すための対象や事象との出会い方の工夫

２年生のころに経験したまち探検の学習をベースに、新たに学習を深めるため、「景観」という言葉の概念を学ぶことにした。ゲストティーチャーとして市役所の都市デザイン課の方々をお招きし、「景観」について動画を見ながら教えていただいた。【図３－２】景観とは、景色に似ている言葉だが、五感で感じることが大切であるということが分かった。

【図３－２　景観学習】

イ　合科的・教科横断的な授業デザインの展開

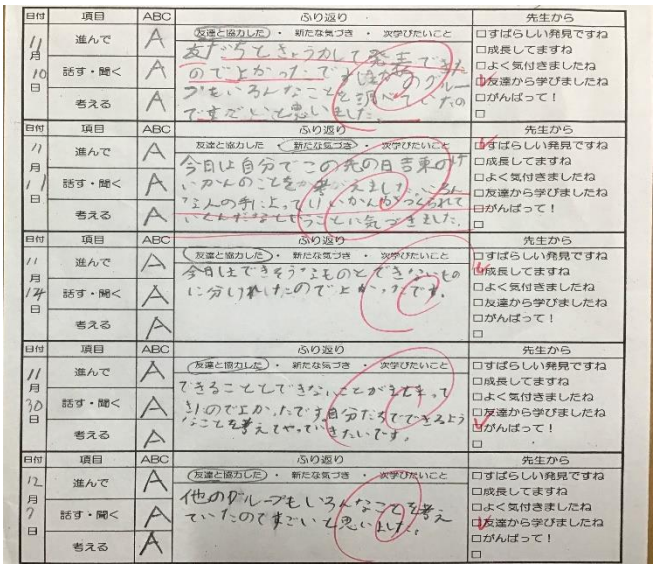
社会「校区調べ」の学習では、学校の屋上から見た東西南北の街並みを見て、実際に校区を歩いて調査することになっている。本校には屋上がないため、済生会病院の協力を得て、そこの屋上から校区の景色を見せていただいた【図３－３】。校区全体の様子を方位とリンクさせながらつかんだ後、実際にまちを歩き、方角ごとの土地利用の特徴を把握することができた。このことは、その後の総合的な学習の時間における校区の景観を考えるためにも有効であった。

【図３－３　屋上から見た校区】

③　視点２　自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫（つなげる）

ア　振り返りを書く際の視点の工夫

振り返りでは、子供が多様な意見や考えに気付き、思考が広がるように自分と友達の考えを比べながらシートに書くことができるように意識した。「友達ときょう力した」「新たな発見」「次学びたいこと」を書くように振り返りシートに欄を設けた【図３－４】。欄を設けたことで、子供たちは、自分の学びだけでなく、友達の学びにも目が向くようになった。また、もっと学びたいことや班での学習で困ったことを書いている子供もおり、それを全体に問いかけていくことで、次の時間の学びにつなげることができた。

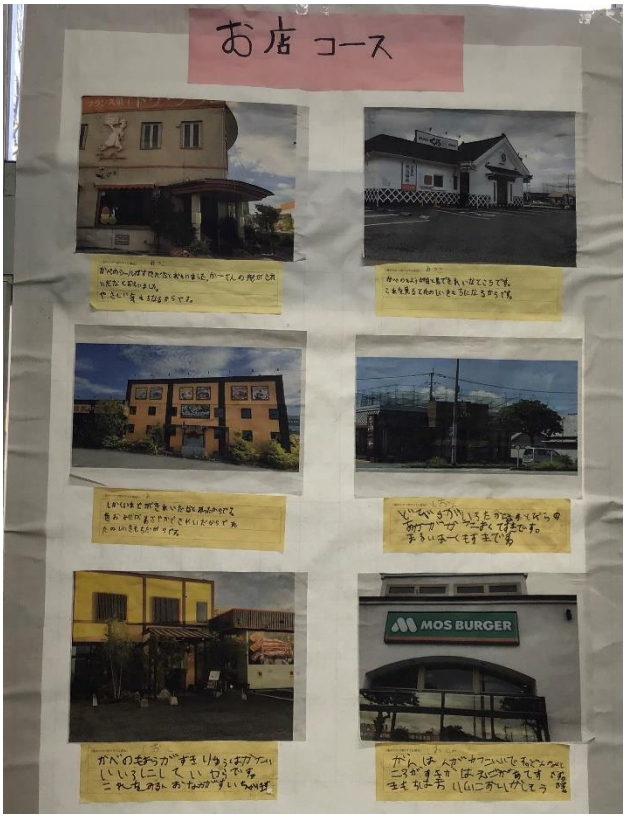


日付	項目	ABC	ふり返り	先生から
11月10日	進んで	A	友達と協力した・新たな気づき・次学びたいこと 友だちもきょうかして発表できたのでよかったです。ほかのグループもいろんなことを調べてたのですごいと思いました。	□すばらしい発見ですね □成長してますね □よく気付きましたね □友達から学びましたね □がんばって！ □
	話す・聞く	A		
	考える	A		
11月11日	進んで	A	友達と協力した・新たな気づき・次学びたいこと 今日は自分でこの先の目吉東のけいかんのことを考えました。また、友人の手によってしいかんがつくられていたことを考えたりすることに気づきました。	□すばらしい発見ですね □成長してますね □よく気付きましたね □友達から学びましたね □がんばって！ □
	話す・聞く	A		
	考える	A		
11月14日	進んで	A	友達と協力した・新たな気づき・次学びたいこと 今日はできそうなものとできないものに分けれたのでよかったです。	□すばらしい発見ですね □成長してますね □よく気付きましたね □友達から学びましたね □がんばって！ □
	話す・聞く	A		
	考える	A		
11月30日	進んで	A	友達と協力した・新たな気づき・次学びたいこと できることとできないことがあるけれどもよかったです。自分たちでできるようなことを考えてやっていきたいです。	□すばらしい発見ですね □成長してますね □よく気付きましたね □友達から学びましたね □がんばって！ □
	話す・聞く	A		
	考える	A		
12月7日	進んで	A	友達と協力した・新たな気づき・次学びたいこと 他のグループもいろんなことを考えていたのですごいと思いました。	□すばらしい発見ですね □成長してますね □よく気付きましたね □友達から学びましたね □がんばって！ □
	話す・聞く	A		
	考える	A		

【図３－４　振り返りカード】

イ　振り返りを生かし、次の探究活動へつなげる指導の工夫

校区の「好きな景観」についてグループごとに調べたことをまとめ、掲示した【図３－５】。このことで、「自分は、なぜこの景観が好きなのか」を振り返ったり、「ほかの子供がどのような思いを抱いているのか」を知ったりすることができた。また、「今後もっとこうなっていくとよい」という理想の景観を思い描くきっかけにもつながった。



【図３－５　学習のまとめ】

④　視点３　課題解決に向け、子供同士の関わり合いを生み出すための工夫（つながりあう）

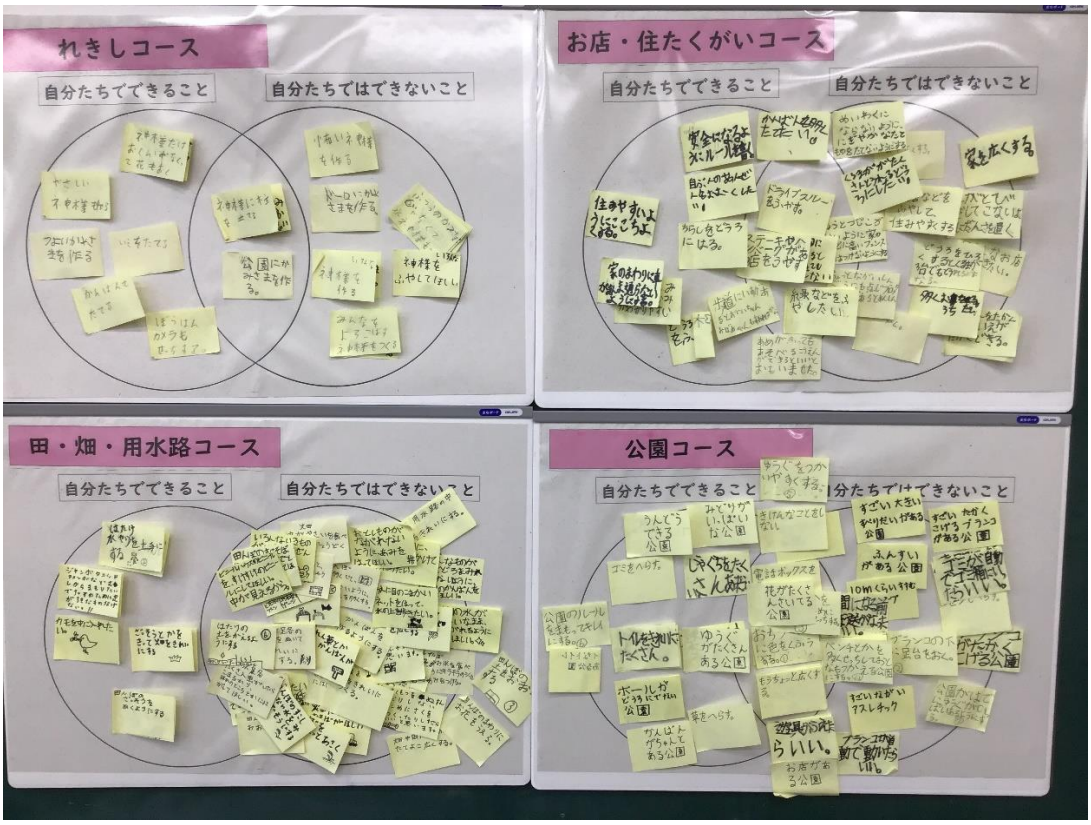
ア　考えや意見を整理し、可視化する工夫

「校区の理想の景観に向けたアイデアを出す」場面では、「ベン図」を用いて、「自分たちでできること」「協力してもらえれば自分たちでできること」「自分たちではできないこと」という仲間分けを行った【図３－６】。このことは、今後外部（熊本市都市デザイン課等）に協力をお願いしたり、実際に自分たちで取り組んだりする際の計画づくりの参考となった。

【図３－６　ベン図による分類】

イ　思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）

ベン図で仲間分けを行った結果を掲示し、ほかのグループと思いや考えを共有できるようにした【図３－７】。互いに分類結果を見合って、各グループが思い描く理想の景観やそれに向けての具体的な取り組み、協力を依頼することの必要性等を考えることができていた。



【図３－７　すべてのグループの分類】

⑤　考察

当初は校区について、自分の住んでいる場所以外のことは馴染みのない子供も多く、「景観」という言葉も初めて聞いた子供が多かった。しかし、学習を経て、現在は校区の未来の理想の景観に向けて、思考を重ね、協力をお願いするプレゼンを作成しているところである。今回の学習をきっかけに、自分たちの校区の魅力に気付き、誇りと自信を持って他の方々に紹介できる人に育ってほしい。

⑵　第４学年　総合「目指せ！日吉東防災マイスター　～守ろう。かけがえのない命～」の実践

①　単元の概要

日吉東校区は地域を囲むように用水路が張り巡らされ、その水は白川から流れて来ており、先人の努力によって農業用水が整えられている。地域に恵みをもたらす大切な用水路ではあるが、近年の異常気象による大雨や線状降水帯の発生により水が溢れ出す危険性も高く、実際に何度か浸水した箇所もある。先人から受け継がれてきた思いを大切にしながら、自分たち自身も安心して生活していくために、自分たちに何ができるかを考え実践していくことは、今後この地に愛着を持って生きていく子供たちにとって重要かつ必然性が高い教材であると考えた。

また、バーチャルタウンを使ったマイタイムラインづくりはこの先、いつ、どこで、どんな状況で災害に遭遇するか分からない子供にとって重要な活動である。今までの学びで得た知識を活用し、他者と協働してマイタイムラインを作成し新たな見方や考え方にふれることで、これからの社会を安全に生きるための資質と能力を高めることができると考えた【図４―１】。

【図４－１　学習の流れ図】

②　視点１　子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫（つなぐ）

ア　子供の思いや願いを引き出すための対象や事象との出会い方の工夫

自然災害が起こった実際の動画やニュースの映像を視聴して確認することで、日吉東校区でも起こりうることへの危機意識を高めるとともに、ハザードマップやマイタイムラインの必要性に気付き、作成への意欲を高めることができるようにした。【図 4-2】

【図４-２　ハザードマップづくり】

授業の導入で、２年前の熊本豪雨のニュース映像から自分たちの身近な地域での災害を知った子供たちは、恐怖感と共に、ハザードマップやマイタイムラインの必要性を強く感じたようだった。実際に自分の家がどれ位浸水するのかを調べるハザードマップづくりでは、想像より深く浸水することを知り、安全に避難するための経路を必死に探す姿が見られた。

イ　合科的・教科横断的な授業デザインの展開

社会科の「自然災害から人々を守る」の学習を通して、『公助』の大切さを知り、自分たちの命を守るために多くの人が関わっていることを学んだ。国土交通省や気象予報士と連携して水害の体験活動を行うことで、専門的な講話から水害の恐ろしさをより身近に感じ、水害が起こった際の手立てや行動の必要性や、『自助』や『共助』について考えられるようにした。【図４－３】

【図４－３　水害の体験活動の様子】

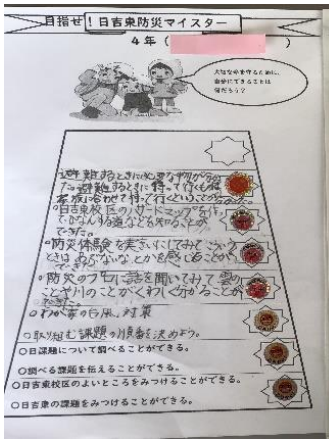
「公助」のために多くの人達が懸命に働いていることを知った子供たちは、災害に備えて自分たちに何ができるのかという「自助」について考えるようになった。その中で、より詳しく専門的な話を聞きたいという思いが生まれ、国語の「お願いやお礼の手紙を書こう」での学習を生かし、河川のプロである国土交通省河川事務所の方や、気象のプロである気象予報士兼防災士の方に講話をお願いし、課題解決に向けて自分たちで考え、行動を起こすことができた。

③　視点２　自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫（つなげる）

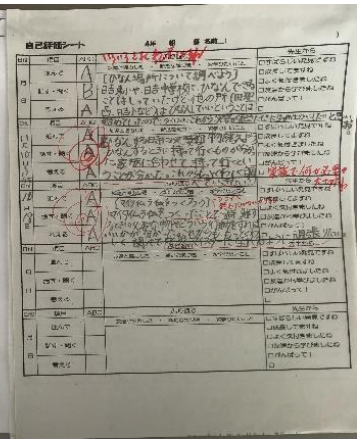
ア　振り返りを書く際の視点の工夫

自己評価シートでは、振り返りの視点を「友達と協力した」「新たな気付き」「次学びたいこと」の３つに分け、短時間で簡単に記入できるようにした。また、子供が自らの課題を解決したり、新たな知識を獲得したりすることで、「防災マイスターへの道」カードで１歩ずつ進んでいることがわかり、自己の変容を確認しながら次の意欲へとつなげるようにした【図４－４】。

振り返りの視点が示されていることで、簡潔に活動を振り返ることができていた。また、小単元を終える度に「防災マイスターへの道」を一段ずつ上ることで、培ってきた力を振り返ることができると共に、達成感や次の意欲へとつながっていった。【図４－５】



【図４－４　「防災マイスターへの道」カー



【図４－５　ふりかえりカード】

イ　振り返りを生かし、次の探究活動へつなげる指導の工夫

授業の導入部分では、前時の振り返りや学習の流れが分かる写真や動画を準備することで、今までの学びの軌跡が分かり、次の課題に向けて意欲的に取り組むことができるようにした。

授業の振り返りでは、次への課題を子供たちと共に設定し、次時の導入で再確認してから活動に入るという流れが確立できた。子供たち自身が、自分たちの思いを繋げて授業を進めているという思いを強く持っていたように感じた。

④　視点３　課題解決に向け、子供同士の関わり合いを生み出すための工夫（つながりあう）

ア　考えや意見を整理し、可視化する工夫

架空の街「日吉東ニュータウン」で、家族構成や家の立地や構造等に変化を持たせることで、置かれた状況から安全に避難できるように、それまで得た知識を活用し協働しながらマイタイムラインの作成ができるようにした。また、グループで話し合ったり、友達の意見を聞いたりして修正や確認が簡単にできるようにタブレット上のシートを使い、付箋に意見を記入して動かすようにした【図 4-6】【図 4-7】。

いつ、どこで、誰と災害に遭遇するか分からない子供たちにとって、架空の家族構成や住宅状況を念頭に置いて避難する方法を考える授業は、それまでに得た知識を確認するよい場面となった。まずは一人で考え、その後グループで話合いながらよりよいマイタイムラインを練り上げていく過程で、考えを共有したり深めたりすることができるようになった。

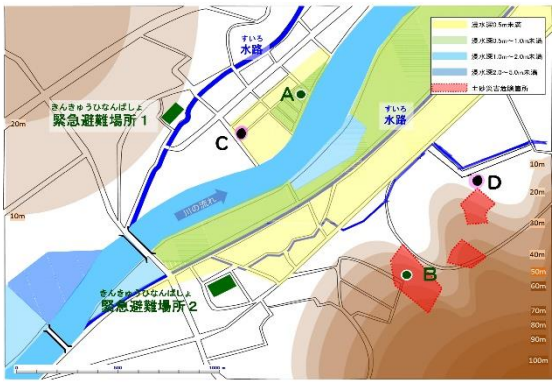
【図４－６　マイタイムラインづくり】

【図４－７　グループで完成させたマイタイムライン】

イ　思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）

架空の街、日吉東ニュータウンの地図には、大雨で浸水する場所を色分けし、危険箇所や避難場所を複数準備することで視覚的にわかりやすく、情報の共有がしやすくなるようにした。【図４－８】

日吉東ニュータウンのイメージ地図の他に、ハザードマップを準備することで自宅から避難所まで危険箇所を回避して安全に避難できる経路を考えることができた。また、マップをタブレット内に保存することで、いつでも開いて確認することができ、自分と友達のマイタイムラインを伝え合う際に役立てられた。



【図４－８
話合いで利用したハザードマップ】

⑤　考察

学習を始める前は、自分の家や学校周辺の危険箇所を何となく知っている程度の子供たちだったが、「大切な命を守るために」を合言葉に、防災に対する調べ学習や体験学習に取り組む中で、災害が起こる前の準備や行動が大切であると気付くことができた。防災に対する意識が高まる中で取り組んだ「我が家のスペシャルマイタイムライン」づくりでは、家族の状況や性格、家の立地や構造等、細かいところまで意識して準備物や行動について考えることができた。出来上がったマイタイムラインは家に持ち帰り、家族で話合いを行い、付け加えや変更をしながらより詳しく内容を共有することができた。家族の防災意識を高め、これからの行動に大きく役立ってくるものと考えられる。

⑶　第５学年　総合「水環境とわたしたち　～自分たちにできることを発信しよう～」の実践

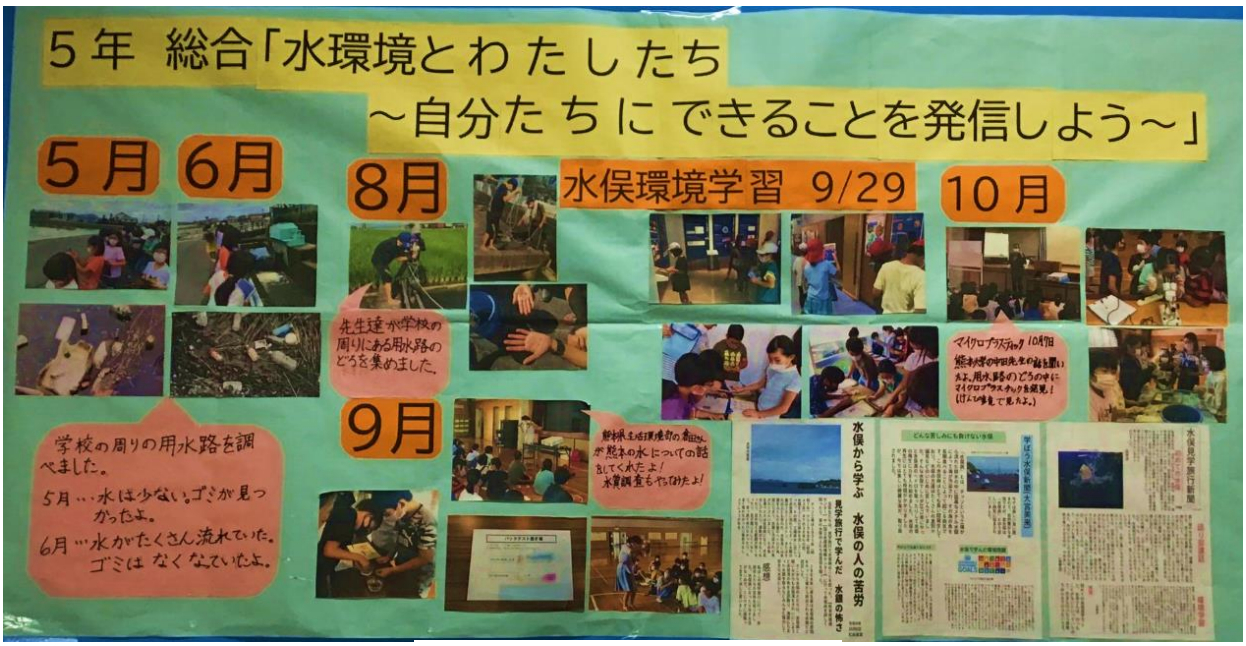
①　単元の概要

環境問題とは、世界中の人々が抱えている問題である。日吉東小の子供たちにとって身近な環境問題を考えた時、校区をとりまく用水路がある。そこで、水環境の学習に取り組んだ【図５－１】。

まず、小単元１「用水路について調べよう」では、「用水路の基本的な役割を学習」→「理想の用水路を考える」→「実際に校区の用水路を見学すること」を通して、理想と現実の違いに気付かせ、よりよい環境になるような取組を行うことで学習を進めた。

次に、小単元２「川や海について調べよう」では、熊本の地下水や河川、水俣等の海の現状を知り、自分の興味を持ったことを深く調べることで、水環境の課題を見つけ、解決に向かう啓発動画を作成し、発信する活動を行った。学習を進めていく中で、自分たちの生活は水を通して様々なものとつながっていることを知ることができた。用水路、地下水、川、海の水環境を調べ、学びを深めることにより、持続可能な社会の構成員の一人であることに気付き、水環境を守るために自分ができる行動を考えることにもつながるのではないかと考える。

この学習を進めた後に、水環境だけではなく、SDGｓの１７の目標を知り、環境問題全体の課題に対してさらに探究活動を行い、自分にできることを考え、行動することをねらいとした。



【図５－１　学習の流れ図】

②　視点１　子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫（つなぐ）

ア　子供の思いや願いを引き出すための対象や事象との出会い方の工夫

課題設定につながる導入の場面では、子供たちがよく目にする身近な水環境である用水路から学習に入り、水環境への関心を広げることで子供たちが関心を持って取り組むことができるようにした。用水路見学を行った際、学校からピンク色の排水【図５－２】が流れ出ており、その瞬間を子供たちが目撃することにより、子供たちの環境に対する課題意識や危機意識を高めることができ

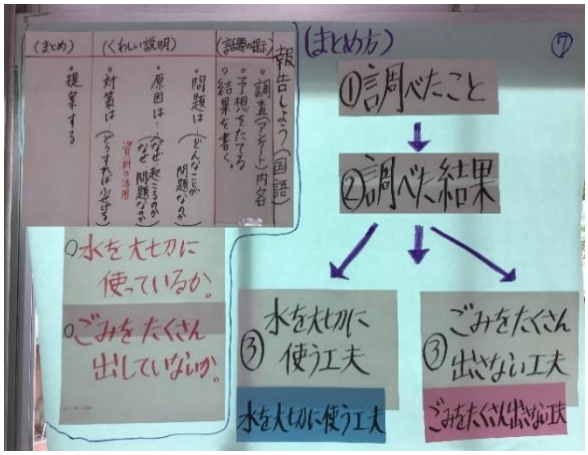
【図５－２　用水路のピンクの排水】

た。その後、本来用水路とはどうあるべきかを考え、理想と現実の違いを埋めるために自分ができることを考えることで、より主体的に学習に取り組む姿勢につながった。

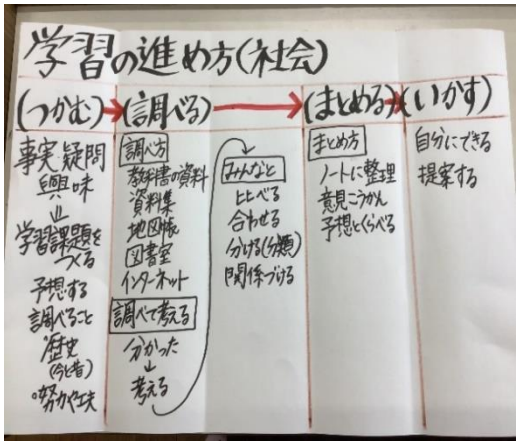
また、夏休みに用水路を綺麗にする取組を行った。しかし、「一人で頑張っても現状はすぐには変わらない」ことを体感し、子供たちは「たくさんの人達に水環境のことを知ってもらいたい。」「自分たちにできることを発信しよう。」という思いを持つようになった。

イ　合科的・教科横断的な授業デザインの展開

子供たちには自分たちの生活と環境との関わりについて、自分にできることに取り組むという目的意識を持たせた。国語科「環境問題について報告しよう」で学習した「集めた資料を図やグラフを引用しながら、自分の考えを伝える力」や社会科「低い土地のくらし」で学習した「川の流れや川を生かしたくらし方」を生かして、動画を作成すること等に取り組むことができた。また、総合的な学習の時間で学習した「タブレットを生かして動画を作成する力」をもとに国語科「注文の多い料理店」では、物語のおもしろさを発信するための予告動画を作成し、総合から各教科へと横断的に学習することができた【図５－３】【図５-４】。



【図５－３国語「環境問題について報告しよう】



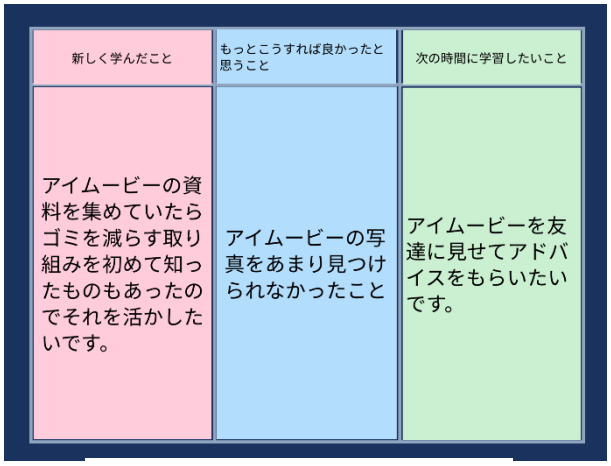
【図５－４社会「低い土地のくらし」】

③　視点２　自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫（つなげる）

ア　振り返りを書く際の視点の工夫

話合い活動の中で、気づいたり考えたりし　たことが、自らの学習をつないでいくものになるよう、「振り返り」の時にＰＭＩシート【図５－５】を活用し、現在の学習と過去の学習を関係づけ、学びの広がりが実感できるようにした。単元を通して振り返り項目を「新しく知ったこと」「もっとこうすればよいなと思ったこと」「次に学習したいこと」の３つに固定することで、子供たちもこれらの観点を意識して授業に参加できるようになった。

具体的な子供の記述として、「新しく知ったこと」では「学校の周りにもマイクロプラステ



新しく学んだこと	もっとこうすれば良かったと思うこと	次の時間に学習したいこと
アイムービーの資料を集めていたらゴミを減らす取り組みを初めて知ったものもあったのでそれを活かしたいです。	アイムービーの写真をあまり見つけられなかったこと	アイムービーを友達に見せてアドバイスをもらいたいです。

【図５－５　PMI シート】

ィックが多くあることを初めて知りました。」等、知識面等の記述が多かった。「もっとこうすれば良かったこと」では「動画で音声を入れれば良かった。」等、授業の内容に関する内容が多かった。「次に学習したいこと」では「動画のアドバイスを次に生かしたい」「今日学んだことをもっと深く学習したい。」等、次時につながる内容が多かった。

イ　振り返りを生かし、次の探究活動へつなげる指導の工夫

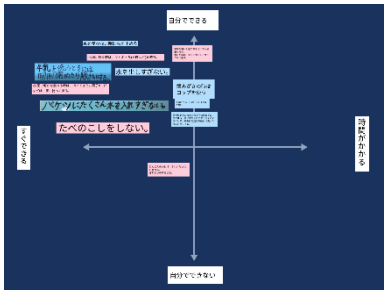
前時までの子供の振り返りの中から本時の学習課題につなげ、学習の手順や方法を全体で共有する場を設定し、子供の探究活動の意欲を引き出すようにした。単元を通して学習する中で子供たちが探究活動に行き詰った時や、学習活動が大きく変更するとき等には必ず子供の振り返りを授業の冒頭で紹介**【図５-６】**し、子供たちの意見から授業を行っていくことを意識した。このように学習を進めることで、子供たちの言葉から授業を展開し、子供たちの意見を反映した授業を行うことができた。

【図５－６授業冒頭での振り返りの紹介】

④　視点３　課題解決に向け、子供同士の関わり合いを生み出すための工夫（つながりあう）

ア　考えや意見を整理し、可視化する工夫

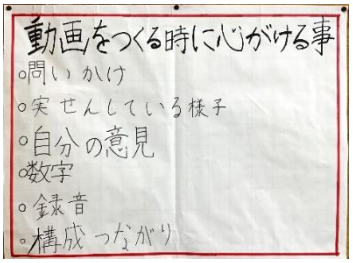
学校の中で水環境に対して取り組むことを考える場面では、「すぐできる・時間がかかる」自分でできる・自分でできない」という２軸で、座標軸**【図５－７】**に整理すること活動を行った。座標軸はタブレットを活用し、自分の取組を座標軸の中で自由に動かしながら考えることができるようにした。子供たちからは「それってもっと時間かかるんじゃないの？」や「自分でもできるんじゃないの？」等の声が聞こえ、子供たちは自分で考えた後に交流することで自分が取り組むことの位置づけを明確にし、確認することができた。



【図５－７　座標軸】

イ　思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）

啓発動画を作成する場面では、動画の作成時に心がけることを提示し、「動画が相手の心に届くように作成されているか」について話合いを行い、学級ごとに「動画作成時の心掛けること」**【図５-８】**を決め、それに沿って動画作成を行うことで、動画内で伝えたいことがぶれないように作成やアドバイス**【図５－９】**ができた。



【図 5-8 動画作成時の心がけ】

⑤　考察

単元のはじめでは水環境についての知識が少なく、自分たちとは遠い物事と捉えていた子供たちだったが、３つの視点をもとに導入の工夫や振り返りの工夫を行うことで、水環境への知識が豊富になったり、啓発動画作成への意欲が増したりして、主体的に学習に取り組む姿が見られた。今回の学習を通して、これから環境問題に興味を持ち、自分たちにできることを実践しながら、周囲の人にも環境保全の大切さを伝えられる人に育ってほしい。

【図５－９　アドバイスの様子】

⑷　第６学年　総合「熊本旅行プラン～一緒にどう？熊本の旅～」の実践

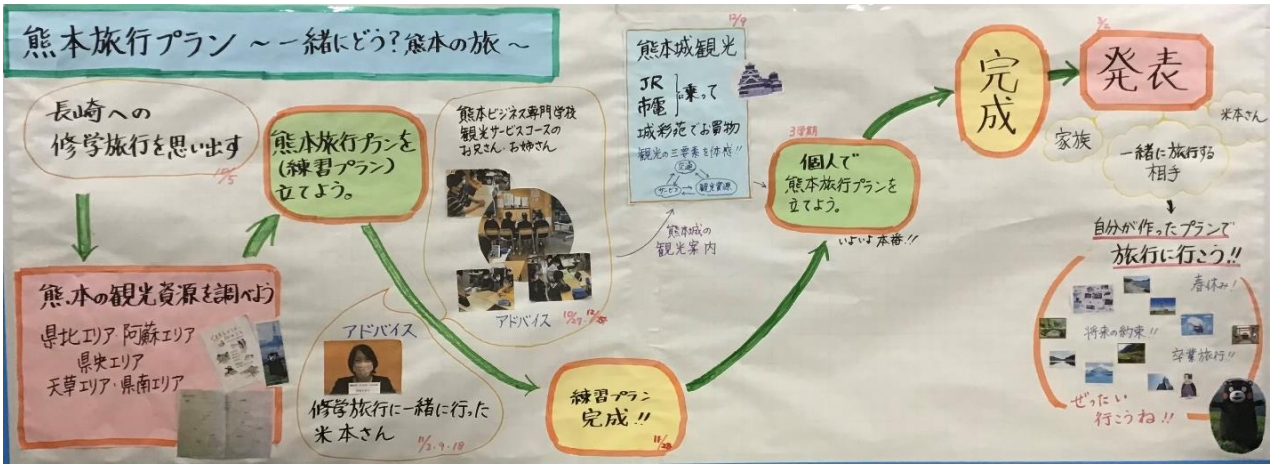
①　単元の概要

熊本県には熊本城をはじめとした歴史的建造物、世界文化遺産である崎津教会、自然豊かな阿蘇や天草、からし蓮根等の郷土料理等、魅力的な観光資源が存在する。実際、熊本地震前までは年間約 6000 万人が観光で熊本県を訪れていた。「魅力」「人気」等の都道府県別ランキングでも１０位台に位置している。自分たちが暮らすふるさと資源を知り、他者目線を意識して整理しながら旅行プランを立てることは、郷土のよさを理解することに有効であると考える。

これから人口減少が進む日本は、経済成長の維持・発展を牽引するために観光の果たす役割が大きくなると言われている。「観光教育」は、観光業の次世代育成、観光産業発展のためだけではなく、次代を担う子供たちが観光の重要性や役割を知ることをねらいとしている。具体的には、観光に関心を持つこと、果たす役割について理解すること、観光客という他者目線で観光資源の魅力や価値をまとめ発信できる力を育むこと等である。

また、社会科の学習において、4 年生では県内の特色ある地域や地場産業、5 年生では日本の産業、6 年生では歴史について学びを重ねてきた今だからこそ、熊本県内のよさや魅力について、産業や歴史の視点から実感を伴った深い理解へとつながると考える。

そこで、子供がこの学習を通して、観光の重要性や役割を知る第一歩になるようにしたいと考え、学習計画を立てた。【図 6-1】

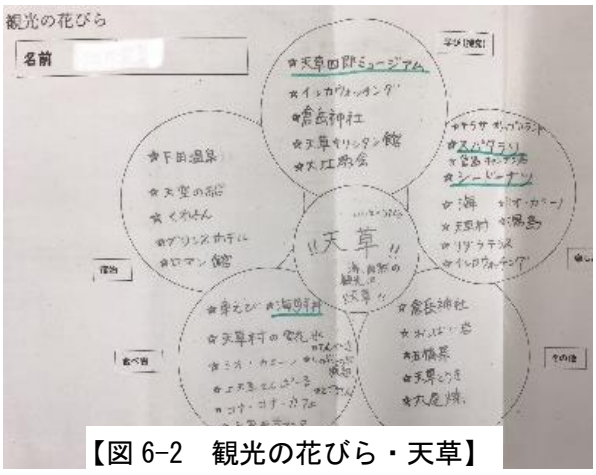


【図 6-1　学習の流れ図】

②　視点１　子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫（つなぐ）

ア　子供の思いや願いを引き出すための対象や事象との出会い方の工夫

修学旅行に行った経験を活かし、長崎と熊本の観光資源を比較し、熊本の観光プランづくりを意欲的に取り組めるようにした。修学旅行は、子供たちの共通体験である。楽しい思い出なので、意欲的に長崎の観光資源を「学び・楽しみ・宿泊・食べ物・その他」を花びらとした「観光の花びら」に書き込んでいた。次に熊本について観光の花びらに書き込んでみると、自分の住む熊本県であるにもかかわらず、長崎より熊本のことを知らない



【図 6-2　観光の花びら・天草】

という子供が多数いた。そこで、５つのエリア（県北・県央・県南・阿蘇・天草）ごとに熊本の観光資源を調べていった【図６－2】。熊本の観光資源の多さや、「天草は海と自然の観光が豊富」等エリアごとの特色に気付いた子供たちは、修学旅行のように旅行プランを作ってみたいという気持ちを持つようになった。

イ　合科的・教科横断的な授業デザインの展開

外国語活動の「Unit6　This　my town.」の目標は、自分の町にあるものやそこでできることを英語で紹介することである。ここで学ぶ表現は「We　have　～.(私たちの町には〇〇がある)」「We　can～.(そこでは、〇〇ができる)」である。これは、総合的な学習の時間でまとめた「〇〇では、〇〇ができる」という視点と同じである。そこで、ALT の先生に、個人で熊本県内のお勧めの観光地を考え、英語で紹介することにした。子供たちは、ALT の先生が喜ぶような観光地はどんな所だろうと相手の気持ちを想像して観光地を選び【図６－3】ALT の先生に観光地を英語でスピーチできた。家族や友達に紹介しようと考えている観光地とは違った観光地を選んでいる子供が多く、外国から来た先生に熊本のよさを伝えようとする姿が見られた【図 6-4】。

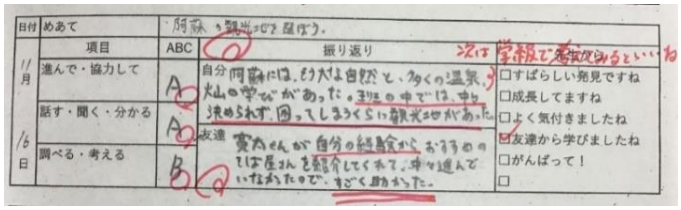
【図 6-3　紹介する時のタブレットの画面】

【図 6-4　ALT の先生に観光地の紹介】

③　視点２　自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫（つなげる）

ア　振り返りを書く際の視点の工夫

「友達の意見を聞いて学んだこと」「自分の今日の学習や今後の学習につなげたいこと」を書くように振り返りシートに欄を設けた。欄を設けたことで、子供たちは、自分の学びだけでなく、友達の学びにも目が向くようになった。また、もっと学びたいことや班での学習で困ったことを書いている子供もおり、それを全体に問いかけていくことで、次の時間の学びにつなげることができた【図６－5】。

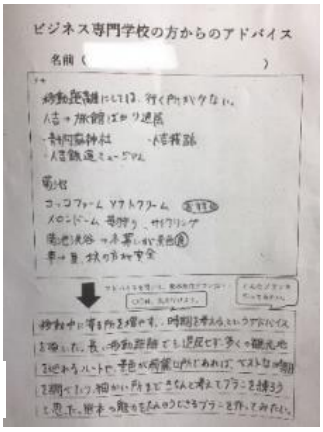


【図 6-5　振り返りシート】

イ　振り返りを生かし、次の探究活動へつなげる指導の工夫

班で観光プランのつくり方を練習し、つくり上げたプランをビジネス専門学校観光コースの生徒さんに見せ、アドバイスをしていただく時間を設けた。ビジネス専門学校の生徒さんには、「①相手意識ができているか」「②他に立ち寄ることのできる観光地はないか」という視点でアドバイスをしていただいた。交流後の子供たちのシートには、ビジネス専門学校の生徒さんか

らのアドバイス「長い距離でも退屈せず多くの観光地を巡るルートを考えるとよい」「観光する時期を考えること」等、自分たちでは思いつかなかった考えを参考にしたいということや、「熊本の魅力が堪能できるプランをつくりたい」と次の個人で作る観光プランへの意気込みがシートに書かれており【図 6－6】、個人プラン作成へ意欲をつなげることができた。

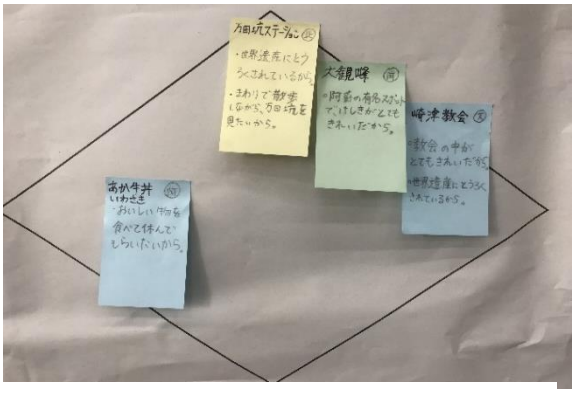


【図 6-6 交流後の振り返り】

④　視点３　課題解決に向け、子供同士の関わり合いを生み出すための工夫（つながりあう）

ア　考えや意見を整理し、可視化する工夫

観光プランの中心となる観光地を決める場面では、グループの話合いでダイヤモンドランキングを使い観光地を絞り込んだ【図 6-7、図 6-8】。絞り込んでいく視点は、「相手が喜ぶ観光地であること」「観光地のよさを意識すること」とした。話合いが盛り上がれば盛り上がるほど、相手意識が薄れ、自分の行きたい観光地になってしまう場面もあったが、観光マップに貼った「旅行相手の趣味嗜好や年齢カード」を見ては意識し直し、ランキングを何度も入れ替えていた。「おばあちゃんは、孫の喜ぶ顔を見るのが一番うれしいといつも言っているから、遊園地を選びました。」「祖父母が、お散歩しながら世界遺産を学べる万田坑を選びました。」「猫好きのお母さんが喜ぶように、湯島を選びました。」と相手を意識した観光地を決めることができた。



【図 6-7　ダイヤモンドランキング】

【図 6-8　話合いの様子】

イ　思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）

子供たちが考えた観光マップは掲示し、互いの観光プランを確認できるようにした。子供たちは、休み時間に観光マップを眺め、連れていく相手は同じでも違う観光地を選んでいたり、順序を変えることで時間を有効に活用していたり、他の班の工夫に気付き、自分たちのプランの参考にしていた【図 6－9】。

【図 6-9　プランの掲示】

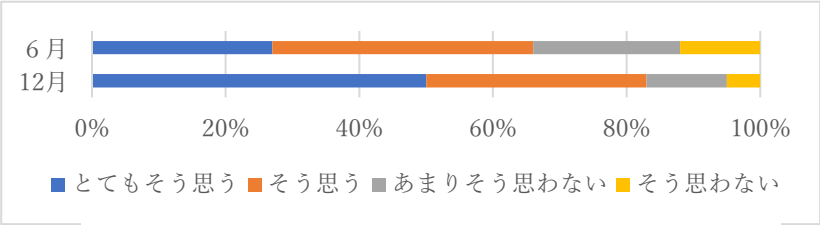
⑤　考察

１泊２日の旅行プランを立てたところ、「熊本には行きたい観光地がたくさんあるから１泊２日では足りない。」という言葉が子供たちから出てきた。導入で熊本県の観光地を書き出せなかった子供たちだが、郷土の魅力を知ることで郷土を愛する心を育むことができたと考えられる。今回の学習をきっかけに、県外や海外の人に熊本県の魅力を胸張って紹介できる人に育って欲しい。

4　研究の成果と課題

⑴　視点１　子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫（つなぐ）

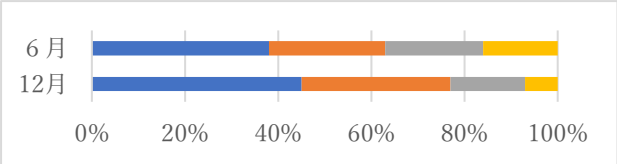
単元配列表等を活用し、課題設定や単元構成を工夫した結果、子供の「自分が学びたいことを調べられている」という意識が 66%から 83%へ高まった【図２】。子供の意欲を高める課題設定に難しさを感じていた教職員は子供の思いを大切にした授業づくりへの意識が高まり、子供と楽しく活動ができたと実感していた。



【図２　調査「学びたいことを調べられているか。」

⑵　視点２　自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫（つなげる）

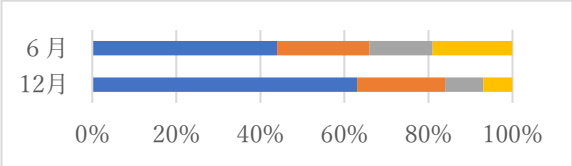
振り返りを工夫した結果、子供も教職員も「振り返りは役に立つ」と思う人数が増えた。子供は、「わ分かったこと・思ったこと・次にしたいこと」等を振り返りに書けていると考えており、教職員は、内容に深まりがある子供が増えてきたと実感していた。手立ての必要性も感じていた。



【図７　調査「振り返りは役に立つと思うか。」

⑶　視点３　課題解決に向け、子供同士の関わり合いを生み出すための工夫（つながりあう）

関わり合った結果、話合い活動を楽しむ子供が 66%から 84%へ増えた。また、思考ツールを活用して話合いができると考える子供も 60%から 79%へ増えた。教職員は、「話し合ったり、考えたりする時間や機会が増えたことで、仲良くなり、学級のまとまりを感じた。」や「思考ツールで自分の考えをまとめる力や iMovie 等を作成する技能が身についた。」等の感想が見られた。



【図８　調査「話合い活動は楽しいか。」

5　おわりに

総合的な学習の時間で実社会や実生活の課題を探究し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往還することは、自分の人生や将来とつながり、自己の生き方を問うことにつながる。子供に自己の生き方を問うつもりが、授業を通して、教職員自身も自己の生き方を問うことになり、子供と共に学ぶ楽しさを実感した。これからも、子供と共に、私たち教職員も一人一人が持続可能な社会の担い手として、質的豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していきたい。

6　引用文献・参考文献

⑴　小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　総合的な学習の時間編　平成 29 年
⑵　田村 学『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社　平成 29 年
⑶　田村 学『深い学び』東洋館出版社　平成 30 年
⑷　第 16 回九州小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会研究大会　熊本大会紀要　令和 4 年